

市内最古の地形 りゅうきじゅんへいげん ー隆起準平原ー

地形図上で読みとれる市内の最高所は、永沢寺と篠山市との境界の山頂で、標高が697.7mあります。このように標高が高い地点は市内では母子・永沢寺・乙原周辺の小野地区北部に集中しています。

ところで、小野地区北部にある市内最高地点の山頂はふもとの永沢寺からみれば、標高差はおよそ182mしかありません。一方、それよりも低い山である高平地区の大船山(標高653.1m)ではふもとの十倉との標高差はおよそ450mもあります。このように小野地区北部の母子や永沢寺は、集落のある土地自体が高く、市内の高原地帯を形成しているためです。

さらに特徴的なのは、これらの集落は、山間部に位置するにもかかわらず大変平坦であることです。例えば永沢寺では、かつて水田だったところが四季折々の花の名所として整備され、市内外からの多くの観光客で賑わっています。また母子のなだらかな斜面地は、古くから茶畑として利用され、三田を代表する特産品の母子茶を育てています。

このような里の恵みの舞台である小野地区北部の高原は、隆起準平原と呼ばれ、市内では最も古い地形とされます。隆起準平原はもともとのけわしい山並みが、まず低い標高のもとで長い年月の間に浸食されてなだらかな丘陵や平原となり、その後地殻変動によって持ち上げられてできあがった地形だとされます。その形成年代は現在のところ定かではありませんが、山が平原状にまで削られる時間と、それが海面に近い水準から現在の高さにまで隆起するという、二段階の気が遠くなるような過程を経てできあがった地形なのです。

このような地形は、市内では小野・高平両地区の境界付近などでもみられます(市史第10巻付図参照)が、そもそも三田盆地の各所でみられる武庫川の曲がりくねった蛇行もまた、形成時期は異なりますが平原からの隆起という地形の変動から説明されるようです(市史第1巻)。

市内の高原で一足早い秋の深まりとともに、大地の悠久の営みに触れてみてはいかがでしょうか。



永沢寺の景観